Uzan Nagao and Rokusanen

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6985

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　第五十三号、令和三（二〇二一）年三月

長尾雨山と六三園

松村茂樹

【キーワード】長尾雨山、六三園、呉昌碩、文人交流、近代日中文化交流

はじめに

近代の漢学者・長尾雨山（一八六四―一九四二）[1]は、一九〇三年十二月から一九一四年十二月まで足かけ十二年にわたり中国上海に滞在し、当時中国最大の出版社であった商務印書館に勤務しながら、「中国最後の文人」と称された呉昌碩（一八四四―一九二七）をはじめとする上海の文人たちと交流した[2]。

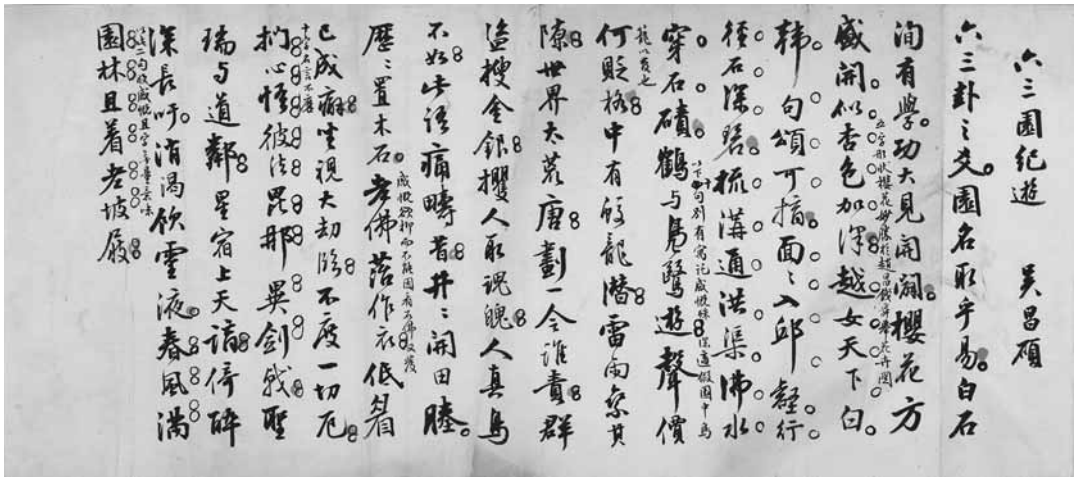
その際、雨山が文人交流の場としてよく用いたのが、長崎出身の実業家・白石六三郎（一八六八―一九三四）の経営になる六三園という広大な純日本庭園をもつ日本料亭であった。白石六三郎は、旧姓を武藤といい、鹿叟と号した。長崎の人。上海の日本租界でうどん飲食店・三六庵を始め、続いて日本料亭・六三亭を開いて成功し、一九〇七年、租界外江湾路に六三花園、略称六三園を開業した。その財力と指導力で上海在留邦人の中心になると共に、呉昌碩をはじめとする上海の文人たちとも交流した[3]。

本稿は、雨山自筆の六三園に関する資料について考察するものである。幸いなことに、京都国立博物館に寄託されている「長尾雨山関係資料[4]」に、これらが含まれており、長尾家と京都国立博物館学芸部調査国際連携室室長・呉孟晋氏のご厚意により、拝見および写真使用が叶った。この考察により、近代上海における日中文化交流の重要な一断面を明らかにできるだろう。

一、長尾雨山筆写「呉昌碩　六三園紀遊詩」

これは、呉昌碩が作った「六三園紀遊」と題する五言古詩を、雨山が筆写し、句点、圏点および評語を加えたものである。この詩は、呉昌碩の詩集である『缶廬詩』『缶廬集』に収められておらず、極めて貴重である。まずは翻字し、日本語訳を付しておく。

六三卦之爻、園名取乎易。
白石洵有学、功大見開闢。
桜花方盛開、似杏色加澤。
越女天下白、韓句頌可摘。



長尾雨山筆写「呉昌碩 六三園紀遊詩」（京都国立博物館寄託）

面々入邱壑、行径石深碧。
梳溝通洪渠、沸水穿石磧。
鶴与鳧鷖遊、声価何貶格。
中有蛟龍潜、雷雨乗其隙。
世界太荒唐、劃一今誰責。
群盗捜金銀、攫人取魂魄。
人真鳥不如、此語痛疇昔。
井々開田塍、歴々置木石。
老仏苦作衣、低眉已成癖。
坐視大劫臨、不度一切厄。
捫心悟彼法、毘耶異剣戟。
聖瑞与道鄰、星宿上天謫。
倚醉深長吁、消渇飲霊液。
春風満園林、且着老坡屐。

〔六三は八卦の爻で、園名は易経から取っている。
白石はまことに学問があり、功績の大きさは世の開闢以来のこと。
桜花はまさに盛んに開き、まるで杏花に光沢を加えたようだ。
杜甫のいう越女のような天下に名高い色白美人で、韓愈の詩句で称えて桜桃を摘もう。
各々丘壑に入り、小道を行くと石は深い緑色をしている。
溝を梳るように堀を通し、噴き出し水が石の多い川原を穿っている。
鶴は水鳥と遊んでいるが、その声価はどうして貶められようか。
この中には蛟龍が潜んでおり、雷雨を得てその機に乗じる。
世界はあまりにもでたらめで、統一を今誰に求めるのか。
群れなす盗賊は金銀を捜し、人を捕まえて魂魄を取る。
人はまことに鳥に及ばないのか、この語に来し方を思って心を痛める。
整然と田の畔が開かれ、順序よく木と石が置かれている。

石仏は苔を衣にし、頭を垂れるのがすでに癖になっている。
大劫が臨むのを坐視し、一切の厄を渡らない。
胸に手を置きかの法を悟る、維摩経は武器ではないと。
開国の君が生まれる瑞祥はこの道と近く、星が天から下されるのだ。
酔いに任せて深く嘆息し、渇きを消すべく唾液を飲み込む。
春風が園林に満ちているので、まさに蘇東坡の下駄を履こうとしている。〕

次に、雨山の評語を見て行こう。まず、「似杏色加澤」に圏点を付し、以下のように述べている。

五字形状桜花妙勝於趙昌、銭舜挙花卉図。
〔この五字は桜花の美しさが宋の趙昌、宋末元初の銭選（字は舜挙）の花卉図に勝っているのを形容している。〕

つまり、六三園に咲く桜花は、花卉画を善くした趙昌や銭選が画く杏花よりも美しいとしているというのである。詩はこの後に、「越女天下白」と続くが、これは唐の杜甫「壮遊」詩の一句で、西施に代表される越の女性の美しさを桜花に比している。また、「韓句頌可摘」は、桜桃を詠じた唐の韓愈「和水部員外宣政衙賜百官桜桃」詩を想いつつ、桜桃を摘むというのであろう。

また、雨山は、「鶴与鳧鷖遊、聲價何貶格。中有蛟龍潜、雷雨乗其隙。世界太荒唐、劃一今誰責。群盗捜金銀、攫人取魂魄。人真鳥不如、此語痛疇昔。」を指して、以下のように述べている。

以下十句別有寓託、感慨殊深。適仮園中鳥籠以発也。
〔以下の十句は別に寓託するところがあり、感慨はとりわけ深い。たまたま園中の鳥籠に借りて発せられたのである。〕

これより、六三園には鳥籠があり、そこで、「鶴」と「鳧鷖」が遊んでいたことがわかる。雨山は、これを見た呉昌碩が、自らの思いを「寓託」したとするのである。ここで雨山のいう「感慨」とは、雨山が常に親しんでいた東晋の王羲之「蘭亭序」に見える「及其所之既倦、情随事遷、感慨係之矣〔その行きつく先に倦み、気持ちも事情につれて移り変わると、これが感慨につながる〕」のような思いなのであろう。

「鶴」は、後漢の許慎『説文解字』に「鶴鳴九皐、声聞于天〔鶴は奥深い沢で鳴き、その声は天に聞こえる〕」とある特別な鳥である。呉昌碩は、その「鶴」が「鳧鷖」つまり普通の水鳥と遊んだとしても声価は貶められないという。その中に潜むという「蛟龍」は、まだ世に出ない英雄の喩えで、「雷雨」つまり機を得て覇業を成すとされる。「世界」が混乱する中で、統一を図らんとする英雄の出現を望みつつ、「群盗」に「金銀」のみならず、「魂魄」までをも取られる状況を嘆く。そして、『大学』「伝第三章」に見える「於止知其所止。可以人而不如鳥乎〔鳥は止まるところを知っている。人は鳥に及ばなくてもよいものであろうか〕」という孔子の語を世に投げかけ、それがなされなかった来し方に心を痛めているのである。

そして、雨山は、「老佛苦作衣、低眉已成癖。」を指して、以下のように言う。

感慨欲抑而不能、因看石仏又発。
〔感慨を抑えようとしてもできず、石仏を見たことによりまた発せられている。〕

つまり、世を憂う「感慨」が抑えられないまま、「老仏」つまり「石仏」を見て、新たな「感慨」が発せられたというのである。ここから、呉昌碩の思いは仏教の世界に飛んでいる。呉昌碩に六三園を紹介した、弟子でありパトロンでもあった王一亭[5]が仏教に帰依していたことから、

呉昌碩は仏教にも通じていたのである。

雨山は、「捫心悟彼法、毘耶異剣戟。」に二重圏点を付し、以下のように述べる。

十字名言不磨。

〔この十字は名言にして不滅である。〕

つまり、雨山は、この仏教にまつわる「感慨」は、戦いを否定する方向性を有していることを、絶妙の十字で表現されていることに感嘆しているのである。

そして、末尾の「春風満園林、且着老坡屐。」にも二重圏点を付し、以下のように言う。

以此二句収感慨。且字無量意味。

〔この二句をもって感慨を収めている。「且」字には測り知れない意味がある。〕

つまり、この末尾の二句で呉昌碩は、六三園に遊んでいる現実に戻り、今一度、園を巡るべく「老坡屐」を履こうとしているのである。「老坡屐」とは、蘇東坡つまり宋の蘇軾が、ある日、雨に遇い、農家に笠と屐を借りて帰ったところ、婦人や子供に笑われ、犬にまで吠えられたという、南宋の費袞『梁溪漫志』中の逸話に見える下駄である。文人の典型たる蘇軾の下駄を履くとは、文人の姿になるということであるが、「且着老坡屐」の「且」を「まさに…す」と読めば、「まさに蘇東坡が履いたような下駄を履こうとしている」という意味になるが、もし、「かりそめに」と読めば、「かりそめに文人の格好をしておこう」という意味になり、「しばらく」と読めば、「しばらく文人になっておこう」という意味になる。雨山の「且字無量意味」という指摘はなんとも鋭いと言わねばならない。

この呉昌碩「六三園紀遊」詩がいつ作られ、雨山がいつ筆写したのかは記されていないが、おそらくは、一九一四年九月（旧暦）、白石六三郎が六三園で呉昌碩の個展を開催した際、同年十月十六日（旧暦）に呉昌碩が作った「六三園記」[6]とほぼ同時期と思われる。「六三園記」の中で、呉昌碩は、

再折而北、有楼翼然、攬全園之勝、吾友長尾雨山所題為翦淞楼也。今年秋九月、鹿叟与友好為余開書画会、即在是。

〔更に折れて北へ行くと、鳥の両翼をひろげたかのような楼があり、全園の優美を統べていて、わが友の長尾雨山によって翦淞楼と題されている。今年の秋の九月、鹿叟（白石六三郎）と友人達が私のために書画会を開いてくれたのが、すなわちここである。〕

と記し、六三園の主楼・翦淞楼の題書者として雨山の名を挙げ、「吾友」としている。この時、六三園で開かれた呉昌碩の個展は、記念すべき、中国初の個展であった。これを観に来た人々は、呉昌碩を書画家と思っていたことだろう。だが実は、呉昌碩は憂国の「感慨」を催す士であり、もしかしたら、かりそめに文人の格好をし、しばらく文人になって蘇東坡風の文人書画を作っていたのかもしれない。雨山は、呉昌碩「六三園紀遊」詩から、これほどまでに深く呉昌碩の胸中を理解していたのである。

二、長尾雨山「六三園正門由来碑文」草稿

一九二八年十一月四日付『上海日報』「上海之人物と事業」に、以下のような一節がある（原文は総ルビ。一部句読点を補った）。

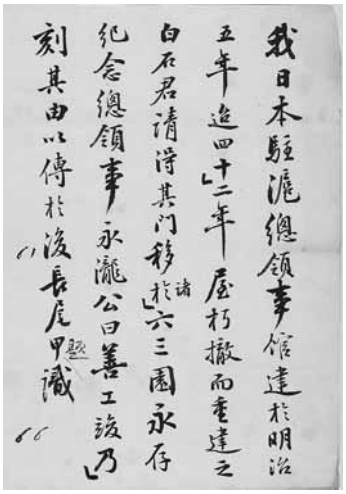
明治四十二年、総領事館が改築せられる際、従来の門石及び煉瓦、用石等は、悉く支那人に払下ぐる事となったが、之を聞知し

たる白石氏は苟且にも帝国総領事館に用ひられたる由緒深き門石を支那人に渡すに忍びずとして、門石は勿論、瓦、鉄扉まで時の永滝総領事に乞ふて之を大切に保管することにした。現在、六三花園正面入口の石門こそ実に当時総領事館の門石である。其後、長尾雨山氏の来滬を機に、門石の来歴を刻して永遠に之を保存することになったと云ふ。

ここに見える、雨山による「門石の来歴」を記した「六三園正門由来碑文」草稿が、前出「長尾雨山関係資料」に含まれていた。翻字し、日本語訳を付しておく。

我日本駐滬総領事館、建於明治五年迨四十二年、屋朽撤而重建之。白石君請得其門移諸、六三園永存紀念、総領事永瀧公曰善。工竣乃刻其由、以傳於後。長尾甲題識。

〔我が日本の駐上海総領事館は、明治五（一八七二）年に建てられてから四十二年に及び、屋舎老朽のため撤去してこれを重建した。白石君はその門をここに移し、六三園で永く保存して記念したいと請い、総領事の永瀧公はそれを認めた。工事が終わったのでその由縁を刻し、後の世に伝えることとする。長尾甲が題識した。〕


長尾雨山「六三園正門由来碑文」草稿（京都国立博物館寄託）

ここには記年はないが、「明治五（一八七二）年迨四十二年」から、一九一四年に書かれたことがわかる。現在は、門石も、刻石も残されていないのは残念であるが、この草稿を確認し得たのは僥倖であった。

当時の六三園正門を撮影した写真を、小堀倫太郎編『写真集 懐かしの上海』（一九八四、四、二〇初版 一九九五、一一、一新装版 国書刊行会）より引用させていただくが、ここにかろうじて門柱を見ることができる。また、門を入ったところに「六三園」と黒地に白字で書かれた垂れ幕が見えるが、書風からおそらく雨山の揮毫になると思われる。

雨山は、六三園を舞台に、呉昌碩をはじめとする文人達と交流し、六三園の名声を高めた。主人の白石六三郎が、主楼の題字や門柱の来歴を雨山に依頼したのも当然のことであったと思われる。

おわりに

本稿では、六三園にまつわる長尾雨山自筆資料二件を分析することにより、雨山が六三園を舞台に行った日中文化交流の一断面を明らかにすることができた。

雨山は、敬愛する呉昌碩の胸中まで理解して交流し、雨山そして呉昌碩を尊敬した白石六三郎が、六三園という舞台を提供することにより、高度な文人交流が実現していた。今回、これを雨山自筆資料により論証できたことが本稿の意義であったと思う。

注

（1）　長尾雨山は、通称を槙太郎、名を甲、字を子生といい、雨山、石隠、无悶と号した。讃岐高松の人。東京大学古典講習科を卒業後、学習院教師を経て文部省専門学務局に勤務し、岡倉天心の依頼により東京美術学校に兼勤した後、熊本の第五高等学校教授となり、同僚となった夏目漱石の漢詩を添削している。次いで、東京高等師範学校教授・東京帝国大学文科大学講師となるが、いわゆる教科書疑獄事件にまきこまれ、無実の罪で東京高師を辞職、一九〇三年十二月、上海に渡り、商務印書館に勤務した。商務印書館では、主に教科書編纂にあたり、日本のノウハウを中国に伝え、『最新国文教科書』『共和国教科書』などを校訂した。また、劉炳照と共に上海で詩会を興し、隣人となった呉昌碩の紹介で、西泠印社社友にもなった。さらには、岡倉天心の委嘱でボストン美術館鑑査委員となり、高度な日中米文化交流を現出した。一九一四年十二月、上海在住足かけ十二年、実質十一年で帰国し、京都に寄寓、平安書道会副会長などをつとめ、在野の学究として尊敬を集めた。

なお、雨山に関する基礎研究に、杉村邦彦「有関長尾雨山的研究資料及其韻事若干」〔中文〕（『西泠印社九十周年論文集・印学論談』一九九三、一〇　西泠印社出版社 所収）、同「長尾雨山とその交友」第一～一五回（『墨』第二六～一二九号 一九九五、一〇、一～一九九八、二、一芸術新聞社 所収）が、雨山と教科書疑獄事件に関する研究に、樽本照雄『清末小説閑談』（一九八三、九、二〇　法律文化社）、同『初期商務印書館研究 増補版』（二〇〇四、五、一　清末小説研究会）がある。

（2）　長尾雨山と呉昌碩の関係については、拙著『呉昌碩研究』（二〇〇九、二、二七　研文出版）、拙稿「長尾雨山と呉昌碩」（『中国文化』第七二号 二〇一四、六、二八　中国文化学会）、同「呉昌碩と長尾雨山の上海愛而近路の旧居について」（『大妻女子大学紀要―文系―』第四九号 二〇一七、三、二〇　大妻女子大学）、同「長尾雨山与呉昌碩交誼的原点――漢長生未央塼及其題詩〔中文〕」『第五届〝孤山証印〟西泠印社国際印学峰会論文集』（二〇一七、一〇　西泠印社出版社）、拙著『呉昌碩と日本人士』（二〇一九、七、五「Otsuma eBook」大妻女子大学人間生活文化研究所）等で論じた。

（3）　白石六三郎および呉昌碩との関係については、前出の拙著『呉昌碩研究』、同『呉昌碩と日本人士』等で論じた。また、拙稿「六三園逸聞」（『大妻国文』第二十八号 一九九七、三、一五　大妻女子大学国文学会）で、六三園に関する逸聞を紹介した。

（4）　呉孟晋『長尾雨山の中国書画受容に関する基礎的研究』（平成二七―二九年度科学研究費助成事業　若手研究(B)研究成果報告書　二〇一八、三、三〇　京都国立博物館）参照。

（5）　王一亭と呉昌碩の関係については、前出の拙著『呉昌碩研究』で論じた。

（6）　呉昌碩「六三園記」については、前出の拙著『呉昌碩研究』で論じた。

【付記】　資料をご提供くださった長尾家と京都国立博物館学芸部調査国際連携室室長・呉孟晋氏に深く感謝申し上げます。

本研究は、令和二年度大妻女子大学戦略的個人研究費「長尾雨山「書画文墨趣味ネットワーク」研究」（研究代表者：松村茂樹）による成果の一部です。